
彩りの縁

はづき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彩りの縁

【Nコード】

N2540Y

【作者名】

はづき

【あらすじ】

昔HPに出して中途半端になっていた小説。ファンタジー設定、異世界トリップもの。恋愛要素有。

地球で育った女子高校生の梨良が銀髪の少女との出会いによって異世界である『天球』にトリップすることに！

そこで梨良は自分の本当の出自を知り、『天球』での命運を握る戦いに巻き込まれ、冒険や戦いを通して成長していく…最後は異世界に残るのか、地球に戻るのか…。

一応メインは女子高校生梨良の話ですが、キャラの目線が変わる

とじころもありがとうございます。

プロローグ（前書き）

ファンタジー設定。

自分でもこの小説をどこに位置付けしていいのか悩んでおります。

一応R15となっておりますので、その旨ご理解下さい。

プロローグ

光は闇があつて、初めて輝く

闇は光があつて、初めて染まりゆく

火は万物を護り、勇気を与えるもの

水は万物を癒し、恵みを与えるもの

土は万物を育み、成長する力を与えるもの

風は万物の恵み、すべての源となるもの

光は万物の平安を望み、希望と平和をもたらすもの

闇は万物の生死を決定し、終焉と誕生をもたらすもの

他にも、あらゆる万物を生かす自然の守護あり

古来より、数々の自然の恵みは潤いと生をもたらす尊きもの

それらは、すべて自然の摂理

星と万物を繋ぎ、すべてが共存して生きている証

忘れるな、我等は自然とともに生き、死ぬのだということ

忘れるな、自然に見放された時が我等の終焉の時ということ

我等は・・・自然とともに在る

プロローグ（後書き）

大層なプロローグですが、このプロローグが活かされる日がくるのかどうか不安です。

彩りの縁1：銀髪の少女との出会い

ドオオオオ
ンッ

・・・槍が降るとかそういう表現で、空からとんでもないものが降ってくるかと表されることはあっても、実際に降ってくるとは思えないし、そんな事実も聞いたことはない。

だが、目の前にはあり得ない光景が広がっていることに、天来 梨良は気づいていた。

悩んだ末に、梨良が口を開いて声に出せたのは何ともいえない一言。

「・・・大丈夫でしょうか？」

「ーはい、お気づかないく・・・いたた・・・。」

もぞもぞと動くその姿にこれまた驚いた。まさか反応が返ってくるとは思わなかったからだ。

梨良は空を見あげ、そして目の前で動く生き物に視線を集中させた。どう見ても夕空が一面に広がっているだけで、何の不思議現象も見られない。なのに、降ってきたのだ。あり得ない常識をぶち破ってー空から人間が。

だけれど、何故か梨良は気づいていた。否、肌で感じていた。

（何故かしら。普通ならきつとここで逃げるべきなんでしょうね。だけれど、何故かー逃げる気にはならないわね。）

梨良の目の前には・・・セーラー服姿の少女が立っていた。恐らく、

梨良と同じぐらいの年齢だろう。
そこまでなら普通の人と変わらない。だが、明らかに地球人ではないことは明白だった。

黒いローブ

銀髪の色

紅い輪の入った白い瞳

日焼けしたように黒い肌

紺色のセーラー服

紅いリボン

そして

死神が持つようなでかい鎌

少女の姿に目を細め、ポケットから携帯を取り出す。

人気戦隊ヒーロー『正義マン』のミニフィギュアのストラップが携帯からゆらり、と揺れて自分の存在を主張している。

梨良は携帯で話している間にも、少女から視線を外さないよう気をつけながら立っていた。

否、目を離せなかった、というほうが正しいだろう。

あの少女の髪の色である『銀』を見れば後ろ姿からでも目立つことは一目瞭然である。しかも黒いローブで座りこんでいるとなれば尚更だ。

そんな少女を遠めに見ながらも、梨良は携帯の相手との会話を続けている。

「そうなのよ、珍しい『銀髪』だし、女の子みたいなのよね。それで、凄く気になるから拾っていいかしら？」

『うーん、でもお兄ちゃんが納得するかなあ……?』

「そうね……一応、彼のところへ連れて行くわ。ちゃんと許可をもぎ取って連れて行くから安心して?」

『……解った。布団と衣類と暖かい食べ物を用意しておけばいいのね……梨良姉さん。』

「ええ、御願いますわ……”カナミ”。」

満足そうに微笑みながら携帯の通話を打ちきり、携帯を閉じた。

それと同時に足は目の前にいる『銀髪』の少女のいる方向へと向いていた。ゆつくりと近寄って行けば、ピクリと『銀髪』の少女の肩が揺れた。

「……あの、どなたでしょうか?」

どうやら気配に気づいたらしい。それに驚きながらも、梨良は口を開いた。

「誰……ああ、私のことね? 私は、梨良：天来 梨良よ。貴方は?」

あっさりと名前を明かした少女に対して、『銀髪』の少女は余計に警戒心を見せた。表情的には眉を顰めたという具合だろうか。

それはそうだろう、この『銀髪』の少女からすれば初対面なのだ。名前だって本名かどうかも解らないのにはいそうですかとあっさりと頷くわけにはいかない。だが、梨良はそんな彼女の様子などおかまいなしに手をゆつくりと差し出したかと思うとぐいっと『銀髪』の少女の腕を引っ張った。

それが余計に警戒心を刺激したのか、慌てたように捕まれた腕をふりきって睨み付ける『銀髪』の少女は改めて目の前の梨良を観察している。

肩より少し長めぐらいの薄い茶髪をたらし、先には砂糖のように甘い巻き毛。

前髪は切りそろえられておらず、目元より少し上、といったところだろうか、後ろに大きなリボンがついているのが印象的だ。

よくよく観察してみれば、肌も白く、唇も桃色のような薄い桃色。

そんな梨良じりょうを前にして見れば”美少女”という印象しか出て来ない。思わず硬直してしまった少女の様子すら気にした様子もなく、ここにこと微笑み続けている。

ちなみに、美少女という印象だと周りから思われているのは少女も同じだった。もっとも、自覚がある梨良じりょうと違って少女にはその自覚の欠片もなかった。故に、少女は気づいていない。梨良じりょうが声をかけたのはそこらへんの心配もあつてのことだと。

「あら、私つたら、警戒されてしまつてるのね。まあ仕方が無いけれども・・・でも、もう一度この路上に座りこむのは、周りの迷惑だから止めたほうがいいわ。」

「・・・え、あつ・・・」

ようやく自分のおかれた環境を思い出したのか、慌てて辺りを見廻す。

確かに先ほどまでは気づかなかったが、周りの通行人達がじろじろ不審そうな目で自分を見ていた。

それに気づいていたたまれない、という風に顔を赤らめた『銀髪』の少女だったが、そんな心境などおかまいなし、と言わんばかりに梨良じりょうは再び彼女の腕を掴んで歩き出した。

「えっ・・・ど、どこへ・・・っ?」

「帰るのよ、私の家にね。」

「……え？え？」

「だって、貴方をあんなところにほっていけないもの。一体どんな事情があるのか解らないけれども、とにかく貴方には落ち着ける場所が必要だと思うの。」

「……あ、貴方は一体……っ！！」

「さつきも言ったはず。私は梨良しりらという立派な名前があるのよ、貴方呼びわりは止めて頂戴ね。ああもう、名前が無いと呼びづらいわね、ね、貴方の名前を早く教えて下さらない？」

「え、あ……サ、サハナと言います……って違いますっ、そんなこと突然言われても……。」

「サハナちゃんね。ああ、これから会う同居人についてなら心配いらないわ。彼は男の人だけれど、もう一人の同居人は女の子だから。」

「そういう問題ではありません！ 初対面の人をどうしてそんな風……に……。」

「だって、あんな路上で……それに、空から落ちてきたんだもの、他の人達から注目されたらどうするのかしら？ 本当にびっくりしたわ……思わず目を見張ってしまったくらいよ。」

「……そ、それは申し訳ないと思っています。だけれどもっ、貴方に迷惑を……！」

かけたわけではない、と言おうとした瞬間、梨良しりらの目が鋭く細まる。その細められた目から見えた眼光に思わず息を飲んだのは、彼女の雰囲気が一瞬にして変わってしまったからだろう。事実、声も僅かにではあるが、反論を許さないような鋭い響きを含んでいる。

「……私の目の前に落ちてきて、痛みをこらえて泣いていた、と
いうだけで十分迷惑よ。」

「っ……。」

「とにかく悪いけど、私は困っている人をほうっておける性分じゃ

ないのよ。多分あの家族の影響もあるのでしょっけれど。」

最後の一言は恐らくサハナに向けてではなく、家族とやらに対しての言葉だったのだろう。

どのみち、梨良りらの言い分ではサハナには反論どころか決定権などないらしい。それを悟った時サハナはがっくりと肩を落とした。

「解りました・・・」

こうして、サハナは天来家にお邪魔することになった・・・梨良りらの度胸ある行為によって。

彩りの縁2：天来家の謎？

梨良はサハナの手を離さず、学生鞆を持ってうきうきと歩いていった。そんな梨良の後をきよるきよるしながらついていくサハナ。

その様子はまるで、初めての友人を連れていく様子に見えて微笑ましい。サハナは黒いローブをかぶっているの、通りすぎる人々から見れば少し怪しい様子だったが、『銀髪』であることを知る人間はいない。

次第に細くなっていく道の角を曲がると、目の前には、和風で二階建ての家が建っていた。

「ここが私がお世話になっている家よ。」

「・・・凄いですね。なんというか、木の家なのに神聖な場のよう感じます。」

「貴方、どんな家に住んでいたの・・・こんな一般的な家だと思うのだけれど。」

「これですか・・・私はこういう建物をみたのは初めてです。」

「洋風の家に住んでいたのかしら・・・。」

会話しながら玄関に入っていく。すぐにある庭にはでかい松の木と池を泳ぐ鯉が見える。

梨良が玄関の扉を開いた時―これから出ていこうとする男の人が視界に入った。梨良はその男の人に声をかけている。知り合いだろうか。サハナが首を傾げた時、男の髪が赤いことに気付いた。目の色は黒かったが、地球にはこういう人間もいるのだろうか、とサハナは深く考えず礼をするに留めた。

「あら、似遠出かけるの？」

「ああ……って、その子は？」

「これから一緒に同居するわ。」

「相変わらずの即決断だな。まあいい……。」

ちらつとサハナを見ながらあつさりと言った梨良に呆れたのか、似遠はそれ以上何も言おうとはしなかった。そしてそれが暗黙に近い了承でもあることを、梨良はきちんと捉えていたのか満足そうな笑みをしている。

サハナはおずおずと以遠の呆れたような口調に恐る恐る口を挟んだ。

「あの……私が御迷惑であれば別に……。」

「あら、以遠君も私も、『迷惑』だなんて言って無いでしょう？」

「でも……。」

「ああ、俺は別に一人増えようがちつとも困らねえから、いくらでも勝手にしてくれ。どうせ、梨良のことだからカナミにも話してあるんだらう？」

最後の一文はサハナに対してではない。押しの強い梨良に対しての皮肉だ。それを梨良も解っている癖にあつさりと言定してくる。それに以遠が再びあきれながらも、サハナに対して自己紹介をしはじめた。

この人達に警戒心というのはこれっぽちものないのだから、とサハナが思わず頭を抱えなくなったのは当然かも知れない。

「もちろんですよ。」

「……とりあえず自己紹介するぜ。どうせこれから長いつきあいになるんだらうし……俺は天来 似遠。一応、梨良とは同居人になる。」

「はあ……よろしくお願いします。」

「で、そちらさんは？」

「あ……失礼しました、えっと私は……サハナ、サハナ」デザ
ート……と、言います。」

梨良は、二人が会話を始めたのを確認して、奥の方へと入っていく。
もう一人の同居人であるカナミをサハナに会わせるためだろう。

梨良が奥に行ったのと同時に、似遠の目が揺れた、と思ったのはサ
ハナの気のせいだろうか。

しかし、それが気のせいではなかったことを、サハナはこの直後に
思い知った。

「ふーん……光の姫探しか。御苦労なことだな。」

「……！！」

小さくポツリと呟かれた物言い。如何考えても嘲りの言葉では、と
気づいた時、ようやくサハナはその意味を理解した。というか、こ
の嘲りが理解できなかつたら絶対におかしい。何しろその言葉は間
違いなく、自分に向けられているのだから。

（この人……何故、私の目的を！？……大体、その目的だっ
て天球のシステムを知っていなければ無理なはず……なのに、こ
の人は……）

サハナは顔をばつと上げて、相手の先ほどまで感謝していたはず
の以遠という男の目をきつく見据えた。だが、彼の目の奥には感情
も真意も伺えなかった。しかし、それは言い換えれば、何かを偽っ
ている、ということ。

この以遠という男は油断ならぬ……サハナは直感で感じた。そ
んなサハナの心境を知ってか知らずか、以遠が梨良に向かって大声
をあげている。

「・・・梨良、俺はちよつと出かけてくるからな。」

わかったわー！と奥の方で声がしたので、それに満足したのだろう、似遠いえんは手を振りながら玄関を出て行った。

油断ならない男。とサハナが心の中で呟いた時、後ろでわあつと嬉しそうに叫ぶ声が聞こえた。それに慌てたサハナが振り返ると、そこに立っていたのは、梨良しりともう一人・・・可愛い可愛い女の子が目を輝かせて立っていた。

栗毛の少女。

少女といっても、梨良しりより一つか二つ下ぐらいだろうか。

それでも、梨良しりよりは短めのセミロングがとても良く似合っている。

・・・髪の毛の先がはねているあたりが彼女の活発さに似合っていてなんだか不思議な感じがする。自分と似たような髪形にも関わらず、色や雰囲気の違いでこうも違うのか、とサハナは感嘆していた。

そんなサハナの様子を気にもせず、この目の前の少女もあっさりと名前を告げてきた。思わず、彼女たちに本当に兄弟じゃないんですか、と聞きたくなったほどだ。

「あ、私は天来茅波てんらいかなみって言います。お兄ちゃんや梨良姉しりさんとは兄弟じゃないけど、兄弟けいってことにしといて下さい。」

「・・・よろしくお願いします。」
「早速で悪いんだけども、風呂を炊いたから、入ってくれると嬉しいな。」

「え。」
「なんか黒いローブが汚れるほど地べたに座りこんでずっと動かなかったんだって聞いたんだけど・・・。」

まさか、と梨良しりを振り返って見れば、彼女は非情にも携帯をちらつ

かせていた。それが何なのか、解らないサハナではない。（天球にも携帯はちゃんとする。）

よって、サハナは自分のアホさ加減に思わず頂垂れなくなった。ころうじて頂垂れずにすんだのは、梨良へのせめての抵抗だ。

とはいえ、確かにローブは泥だらけだし、服もよれよれだ。このままでこの家を出歩くには失礼にあたる。そう察したサハナは諦めたように茅波かなみの言葉に甘えることにした。

「申し訳ありませんが・・・お風呂をお借りします・・・。」
「どうぞ、ごゆっくり。」

サハナがさっぱりしたと、風呂から出た時、廊下にいい匂いが漂っているのに気づいた。その匂いにつられて歩いていくと居間の机には沢山の御馳走が並んでいた。

それにあんぐりと口をあけたサハナに、エプロンを付けた梨良りらと茅波なみが笑って呼びかける。

「さ、御飯だよー沢山食べようね。」

「うふふ、一杯作りましたから沢山食べて下さいね・・・あら、似遠君えんはご飯食べないのかしら？」

「うん、友達と食べてくるって言ってたよ。」

止めたんだけどねえ、と苦笑いする茅波かなみに梨良りらは「また？」と呟きながら眉間に皺を寄せている。つまり、日常的なことなのだとサハナは憶測しながらも、前々から聞きたかった謎の一つを質問した。

「・・・以遠さんとは兄弟なのですか？」

それは、ずっと引っかかっていたことなのだ。

「いいえ。彼も同居人というだけで、血は繋がっていないの。一応戸籍は兄弟になっているけれどもね。」

「うん、この天来家てんらいけいの本当の子どもは私と外国にいる弟だけ。」

「そうね、芽波かなみちゃんのご両親が似遠君いえんや私を拾ったって聞いてるわ。」

もぐもぐと唐揚げを食べながら、サハナは目を丸くさせていた。

「えっ・・・じゃあ、本当のご両親については?！」

「私に両親の記憶はないわ。でも・・・似遠君いえんはご両親については覚えてるようよね。ところで貴方は?ご両親が心配しているのはなくて?」

梨良りらが微笑みながら聞いてくる。

それにサハナは少し迷いながらも、ためらう様子を見せている。

「でも、御迷惑を・・・」

「あら、今更よねえ、茅波?」

「本当だよ、サハナちゃん、それは今更つてもものでしょ。どうしてもって思うなら・・・そうだ、ここでの宿賃だと思えばいいじゃないっ」

「・・・えーと。」

いいから話さないで微笑む梨良りらと、楽しげな表情を見せている茅波かにサハナは本日何度目かの危機を覚えた。(いい加減に学習しましょう)しかし、結局恩人には逆らえず、必要な部分だけ抜き出して説明し始めた。

彩りの縁3：天来家の謎？

紅い大地、緑の樹木、白き風、青くも透明に輝く水。

二度と還ることさえなし、我が同胞達。

二度と蘇ることもなき我が故郷。

二度と戻ることのない我が宝。

二度と繰返されることのない懐かしき日々。

それらは色あせることなく、我が目、我が脳裏に焼きついている。

二度戻らぬその懐かしい思い出は永遠に記憶に刻まれる。だけれど、それはすべて我が罪として受け止めねばならぬ。

だって、それらはすべて 自分が 『 』として生れてきたが故に起こったことなのだから。

それでも、『自分』は、選ばなければいけないのだろう。

…すべてをこの手に取り戻すことも、手に入れることも許されない身だからこそ、今のうちに、選ばなければいけない。

解っている。

それが俺に課せられた宿命なのだから！。

サハナが警戒すべき人物なる以遠いえんはというと、とあるところのビルの柵いすに立っていた。

風が強いにもかかわらず、柵の細い部分にバランスを崩すことなく立っていられる足腰は強靱なものだ。パシユ、とライターで煙草に火をつけようとしたその時、周りの気配が揺れた。

それに顔を上げたのと同時に持っていた煙草に突然火がついた。しかし、以遠いえんはそれを見て驚くこともなく、それどころか自然に手に持っていたライターをポケットにしまう。そして、煙草を啜え一息ついてから、手に持ちかえた後、口を開いた。

「・・・マオ、アレは一体どういうことだ？」

しかし、すぐに返答は返って来なかった。

しかし、以遠いえんは根気良く沈黙を保ち続けている。それに根負けしたのか姿は見えないものの、さっきまでは聞こえなかった声がようやく辺りに響いた。

『ごめん・・・でも、でも・・・サハナのことは僕らにも寝耳に水でS A。ほんとに、ほんつとうに不可抗力なんだY O！』

「御託はいい。説明しろ・・・何故、砂漠の娘が異界に、いや地球に来ている？」

マオなる人物の話をはつきり切り捨てながらも、以遠いえんは昼間会った少女の顔を脳裏に思い浮かべた。記憶を手繰りよせながら、サハナについての情報を確認しているのである。

(もしも俺の記憶が正しければ・・・千年国の王子の言っていた奴のはず。王子の城にいた使用人だという情報しかなかったが、一体どういうことだ?・・・よほどの能力者でなければこの地球に来ることなどできないはず。)

『・・・まだ確証はないけれど、我らが闇の姫が言うには、皇王も雷王も利用されているんじゃないかって話だったYO。』

「あいつがそう言っていたのか?それはどうということだ?」

『んゝよくわかんないけれど、あの女が裏で手を引いているんじゃないかって・・・言っていたNA、余り興味なさそうに、ね。』

「・・・」

あの女、と聞いて以遠いえんは脳裏にかつての思い出を思い浮かべていた。その思い出も、今となつては過去のこと。しかし、以遠いえんにとっては決して忘れられない思い出でもある。

しばらく無言だった以遠いえんに、マオが恐る恐る呼びかけた。

『・・・あのお?』

「・・・来たるべき時が、来ているのかも知れないな。」

『え、で、でも・・・!』

「ヒッパルコスの姫や千年国の王子の記憶を封じているとはいえ、さすがに皇王やレオン王を相手にずつと隠しきれるとは思つてなかつたさ。まあ、心配するな。二人のことがばれようとも、俺のことまでには気が回らないはずだから。」

ことさら、ヒッパルコスの姫は特に、な。

何しろ、天球すべての人間が長いこと、待ち望んでいた『光の姫』なのだから。

あの皇王やヒッパルコスの重臣達ならば、そのことを最優先することだろう。

そうすれば自分の方へ目が向くことはない。よほどの事がない限りは。

「……それに、みすみす奪わせやしないさ。どうせなら、相打ちにさせてやるつもりじゃないか。」

『……それでこそ、竜王。』

竜 王

「……当然だろう？ 俺を誰だと思っている？」

ちらりと視線を泳がせながら、啜っていた煙草に目を留める。

それと同時に煙がピクツと止まり、動かなくなった。まるで時が止まったかのように消えもせず宙に浮かんでいる。それを満足そうに見詰めながら、煙草を再び振ると目の前の煙は一瞬にしてかき消されていった。

……何故かその瞬間、脳裏に過ぎったのは梨良の笑顔。

シクンと胸が痛んだような気がした。だがそれでも、以遠は思い浮かべた梨良の笑顔を振り切るように煙草を投げ捨て、足で握りつぶした。

「悪いな、梨良……」

拳を握り締め、遠い過去を偲ぶ。

遠い故郷を想う。

懐かしい今はもう亡き国を想うー。

・・・数々の死体を目の辺りにし、涙を流したあの時のことは、今でも忘れていない。

もう今は亡き、我が父。我が母、我が兄弟。

そして俺の守るべき国、守るべきはずだった民。

今はすべて灰と化し、自然へと還った我が同胞達。

それらを思い出すたびに、俺は全てを憎む。

お前を殺したい衝動にかられる。

それができなかつたのは、お前を想う人間達がたまたま俺の大事な人達だったからだ。

そのうちの1人は、俺を育ててくれた人達。

『駄目よ、以遠君いえん・・・そんなことをしたら貴方を守った御両親も浮かばれないわ。私には解るの、きつと貴方の御両親は復讐なんて望んでいないわ・・・。』

そうでしょう、と悲しげに微笑んだ女性に振り下ろそうとした腕を止められた。

その女性はもう1人の母ともいえる、この地球での養母。

まさか、亡き両親以外に諭されるとは思わなかったけれど、確かに養母の言っていたことは正しい。

竜一族の誇りをかけて戦った我が父上はそれを望んでいなかった。

『よいか・・・そなたはただの竜王ではない。この滅びゆく国を守ることもよりも大事な任務があるのだ。そのためにも、復讐はならぬ。決して彼らにたてつくことも、ヒッパルコスの姫を傷つけることも相成らぬぞ。よいな？』

何故、父上がそう言うのか解らなかった。

だけれども、養母に止められた時、思いつかんだのは貴方の言葉でした・・・父上。

故に、貴方達の反対を受けて、俺が成すべきことは一つしかなかった。

『記憶の封印』

その封印があったからこそ、ヒッパルコスの姫と千年国の王子は今日まで平穩無事にこの地球で過ごすことができたのだと思う。

もっとも、そんなことのために封印したわけじゃないが。

「...あんた達と・・・過ごした日々は結構楽しかったんだが、な。」

残念ながら、終わりの時が近づいてきたようだ。

そう、終わりはいつか必ずやってくる。

我が同胞達がもう生き返ることのないのと同じように。

我が故郷がもうその名を呼ばれる事がないのと同じように。

我が宝が二度戻ってくることはないのと同じように。

懐かしき日々がもう繰り返されることはないのと同じように。

そう

紅い大地、緑の樹木、白き風、青くも透明に輝く水、それらすべてが永遠に我が国から無くなったのと同じように。

。・・・我が国が滅びたように、俺達の関係にも必ず終わりが来る。

そんなことなど、とっくに解っていた。
だけれど、俺はできるなら願っていた。

「このまま、過去も、天球の事も、何もかもすべて忘れて忘れたまま一緒にいられたなら・・・と願っていたのだが、な。」

彩りの縁4：天来家の謎？

「ただいまー。」

明るい声に似遠いえんが帰ってきたのだと解る。梨良しりは慌てて、玄関の方へと向かっていくが、芽波かなみは居間で夕食の後片付けをしていて、サハナも手伝っている。

「ねー、サハナちゃんは何歳？」

「え、じゅ、十六歳です。」

「あ、じゃあ、私より1つ年上だね！梨良しり姉さんとお兄ちゃんは、十七歳だよつ。」

「年上なんですね。そうは見えませんが…。」

2人が年齢について盛り上がっている一方、玄関では、梨良しりが、サハナについての話を似遠いえんに説明していた。

「サハナちゃんはやっぱり異世界から来た人みたいよ。空から降ってきたから地球人ではないとは解っていたけれど・・・不思議なこともあるものねえ。」

「へー、どうしてこっちに？」

「なんでも、探し人がいて、その人を連れて帰らないと『天球てんきゅう』が危ないそうよ。」

「・・・『天球』？」

「ええ。地球にとてもよく似ているけれど、システムが全然違うそうよ。向こうでは、精霊と共存している世界で…それぞれの国に精霊と契約している王族がいるそうなの。で、『天球』で一番偉い王

族の姫がいるんだけど、その姫……”光の姫”が行方不明なんですって。」

「……ふーん、でも、そのことと『天球』が危ないっていうことが、どう繋がるんだ？」

「それが、ね、その姫は『光』の精霊と契約しているの。その姫がいないせいで、太陽の『光』と『天球』が共存できないため、『天球』には夜しかないそうよ。」

「はー。大層なシステムだな。てか、そのえーと、光の姫だっけか。そいつはどうしていなくなっただろうな。」

「……そこまでは聞いていないわねえ。聞いていてびっくりしたわ、ホント、異世界って色々あるのねえ。」

「精霊……か。」

そう呟いた途端、会話を打ち切った以遠いえんの表情からは何も読み取れなくて。こういうところは昔からだな、と思いながらも梨良りらは過去に思いを馳せていた。

「……以遠君。」

「何だよ。」

「覚えているかしら……私が初めて来た時のことを……」

「……何故今更そんなことを聞く？そんなの気にしているようには見えなかったが……」

「なんていうのかしら……彼女から何か不思議な……そう違和感というのかしら。そういうのを感じたの。彼女を見たたん、何か……運命が動く……そんな予感を感じたわ。」

「気のせいだろう。第一、お前を拾ったのは茅波かなみだ。そういうことを聞くならあいつの方が有効だろう？」

「……そう、ね。」

以遠いえんの言葉に納得がいかないのか、まだ何かを考え込んでいる梨良りら

に案内を終わらせた茅波がタイミングよく声をかけた。

「梨良姉さん、お兄ちゃん、何の話しているの〜?」

「ああ、私がおこへ来た時のことを・・・聞いていたのよ。」

「え・・・そんなの、お兄ちゃんが解るわけないじゃない。だって梨良姉さんは私が拾ったんだし。」

「ええ・・・そうだけれども、どうしてかしら。以遠君に聞かなければっていう気になったの。ごめんなさいね。」

「・・・それより、サハナちゃんの着替えのことなんだけれど、私のサイズじゃちよつときついみたい・・・胸が。」

「・・・茅波、そういうことを男の前で言うなって。」

「お兄ちゃんなんて男じゃないもん。だからお願い、梨良姉さんの服を貸してあげてよ。」

以遠の抗議を無視して、茅波は梨良に頼みこむように両手を拝むように前へ向けた。それに苦笑しながらも、快く了承した梨良は二階へと着替えを取りに行った。バタバタと階段を駆け上がる音を聞いた茅波は安堵のため息をついた後、以遠の方に真剣な眼差しを向けた。

「ねえ・・・お兄ちゃん、サハナちゃんって何者なの? お兄ちゃん

んだっいたら解るよね・・・梨良姉さんの時もそうだったもん。」

「・・・」

以遠の沈黙を肯定とみなしたのか、茅波は再びため息をついた後、危惧するかのような表情で質問してくる。似遠は、そんな茅波に苦笑しながらも、今度は先ほどの無言とは異なった返事を返した。

「お兄ちゃん、梨良姉さんは・・・まだ思い出していないよね?」

「当然だろう・・・サハナと会ったぐらいで破られるような記憶の

消し方はしていない。」

「そう・・・それならまだ・・・大丈夫だよね・・・」

「・・・だけれど、覚悟はしておけよ。」

「お兄ちゃん。」

「・・・遅かれはやかれ、梨良が俺の・・・本来いるべき世界へ帰る日はやってくるんだ。それを考えれば、サハナが来た事も決して偶然じゃないはず。」

「・・・ねえ、やっぱり、お兄ちゃん達の世界にあたしも・・・」

「駄目だ。だだでさえ、あの両親の傍にいないくせにこれ以上心配させるんじゃない。・・・海葉が海外留学して、お前は日本で暮らしている。それだけでも両親は心配しているはずだぜ。」

「そうかなあ？ あの夫婦なら二人きりでも問題ないと思うんだけど。」

「・・・それでも、駄目だ。お前はここに残れよな。でないと多分・・・」

キッチンへ行こうとする茅波の背後から、言葉を切りながらも、以遠は続きの言葉を紡いだ。その言葉を聞きながら、扉を閉めた茅波はふうとため息をついた。なんかため息ついてばかりだなあと思いついながらも、以遠の言葉に心が寂しくなった。

『・・・梨良と俺の戦いに巻き込まれるぜ。』

「・・・お兄ちゃん。」

ぎゅ、と拳を握りしめながらも、茅波は思い出していた。初めて兄と会ったあの時のことを。

『茅波かなみ 今日からお前のお兄ちゃんになる奴だぞ
』
『以遠いえんくんっていうのよ、仲良くしてあげてね!』

にこにここと両親が笑って紅い色の髪の子供を紹介してくれた。だけれども、その以遠いえんと呼ばれていた少年は無表情だった。その時に見せてくれた目と目したら…今でも忘れる事ができない。

「……あの時のお兄ちゃん、何もかも諦めきったような目していたものね……。」

しばらくしてようやく以遠いえんも天来家てんらいに慣れたのか、ぽつぽつと自分を出すようになっていた。それでも、時折、どこか遠くをみつめる表情を疑問に思った事があった。

そんな以遠いえんの過去を知ったのはとある日の夜がきっかけ。

咽喉が渴いたから水をとってキッチンに行くと、居間に両親がいたのだ。それも何か心配そうな表情を見せていた。それに疑問を感じて居間に踏み込んでみると、ソファーに以遠いえんがただならぬ様子で横たわっていた。

『……つ……とう、さま……母様……つ……!!!』

苦しそうにうなされている様子だったが、幼い子供である茅波かなみにも何かで苦しんでいるということに気づいた。すぐに両親を問い詰めたが、両親も困っている様子だった。ただ、拾った時からこういう状態は何度かあったという。だから恐らく無表情だったこととか怪我だらけのこととかと何か関係があるのかも知れない、と幼心に茅波かなみは理解した。

そしてその謎が解明されたのはそれから数年後のことだった。

茅波^{かなみ}が以遠^{いえん}と一緒に、梨良^{じりら}を見つけた時に、すべての謎が解けたのだ。何故なら、以遠^{いえん}は梨良^{じりら}を見つけた途端、すぐさまその場で殺そうとしたから。あの時のことは余りにも衝撃的だったから今でも鮮明に覚えている。

慌てたパパがそれを止めて、ママが事情を聞き出してようやく解った事実は私達をとっても驚かせた。

『天球』という別世界のこと

この地球とはまったく違ったシステム

能力を持つ王族の支配する世界

奴隷や獣人など、人間ではない者も共存している世界・・・

それらは何もかもがこの地球には無いものばかりで、もしも実際に証拠を見せられていなければ、信じられない内容ばかりだった。

そして、お兄ちゃんは、梨良^{じりら}姉さんを殺そうとする理由も教えてくれた。それでも、ママは、人殺しは駄目だと諭して聞かせていた。

お兄ちゃんもそんなママの根気に負けたのだろう、梨良^{じりら}姉さんの記憶をなくすだけに留めておいてくれた。

だから、梨良^{じりら}にはここへ来る前までの記憶がない。

でもそれは決して悪いことではないと茅波かなみは思っていた。
だって記憶がないからこそ、梨良りらと以遠いえんは仲良くできているのだし、
自分から離れずに兄弟として、そして家族として一緒にいてくれる。

梨良りらと以遠いえんが傍そばにいてくれること。

それこそが、茅波かなみにとって一番大事なことなのである。だからこそ、
危惧しているのだ、突然現れたサハナによって3人の関係が壊れる
事を恐れていた。

ぐっとこみ上げる思いを堪え、茅波かなみは、再び拳を握り締めながらそ
の場に立ち尽くし、誰にもなくポツリと呟いた。

「サハナちゃん・・・悪いけれども、貴方あなたの世界世界にお兄ちゃんも梨
良姉あねさんも返せないの。」

だから、決して返してなんかやらないわ・・・
貴方あなた達たちの世界世界なんかには戻らせるもんですか!!

彩りの縁5：天球との交わり？

「……………うう……………今日も見つからなかった……………」

ぐったりとよるめきながら『天来家』の門を叩く。最近はこの状態が日常的になりつつあり、サハナも天来家の面々も、天来家に住み付くことに違和感も感じなくなっていた。

サハナの気掛かりの一つは、以遠いえんのことだけだったが、あの初対面の時以降は、彼と一対一で話す機会が無かったため危機感も薄れていた。いや、それ以前に、『光の姫』探しが難航していたこともあり、以遠いえんに気を向く余裕が無かったというほうが正しい。

居間によろよると入ってきたサハナを、梨良りらは笑顔で迎え入れた。

「只今戻りました。」

「お帰りなさい。どうだった？」

「今日も駄目でした……………」

「今日も無駄足だったかあ……………明日も頑張つてね。」

「はいいい。」

梨良りらも茅波かなみも、サハナとの会話に慣れてきていた。夕食も一緒に過ごし、食事も一緒にするようになり、訳のわからんうちに家事や留守番にも慣れてしまっていた。サハナは、そんな自分が怖いと思いつながらもやっぱりどこかで焦りを感じていた。だからこそ、サハナは油断していた。失念していたのだ。

そう、『光の姫』がこの世界（地球）に在るならば……

『闇の姫』もまたこちらの世界に来ることができるといふことを。

いつもの様に梨良りらが、芽波なみやサハナと一緒に食事を作っていた夜。
その日は久しぶりに、以遠いえんも一緒に鍋をつつこうということになって、夕食の準備に追われていたのだ。

ピンポンッ

「あ、チャイムだ。誰だろ？」

「以遠いえんさんがバイトから帰ってきたのでしょうか？」

「あら……変ね、以遠いえん君はチャイムなんか鳴らさないはずなんだけど。」

「お客様かも知れませんが、見てきます。」
「お願いね〜サハナちゃん」

ああ、完全にこの家に溶け込んでしまってるよ、私。そう思いながらもサハナは玄関に向かって扉を開けようとした。だけれど、その扉から見えた人物を見た瞬間にこの扉が禁忌の扉であることを悟ってしまった。

「・・・そんな・・・な・・・」

(そんな・・・ばかな、何故貴方が　!!!)

全てを見透かすような黒い瞳

漆黒の闇という形容に相応しい艶やかな黒い髪。それも、腰ぐらゐまで伸びた長い髪

髪先には砂糖のように甘い巻き毛が風に揺れる

雪のように白い肌、唇も桜のような薄桃色で染まっけて・・・

・ 何より『光の姫』に良く似たその顔も容姿も・・・間違いなく・・・

「・・・サハナがこんな所にいるとは思わなかったわ。」
「・・・っ・・・私も、です・・・貴方が、まさか・・・こんな、
ところ、まで・・・っ!!」

「だって、貴方は、ずっと雲隠れしていらしたはず・・・!」

そう叫べば、彼女の口元が微笑むように歪む。その微笑が『光の姫』
に本当に良く似ていたために、余計に恐ろしく感じた。

「・・・アンタこそ忘れてるわね・・・私を誰だと思っているの？」

・・・忘れられる、はずがない。いいえ、いつそ忘れていたほうが
マシだったわ。

ギリ、と齒軋りしながらも睨み付ける。しかし、彼女に効果は無い
ことを知ってるだけに無意味な行為だった。

そんな時、バタバタと足音がするのに気付いた。まずい、と、我に
返った時には、すでに足音の主である梨良は近くまで来ていた。

(いけない・・・っ・・・今の『梨良』様に彼女を会わせるわけに
はいかない!!)

サハナは慌てながらも近づいてくる梨良を制しようと大声を上げた。
しかし、時は遅く、梨良の方が、サハナの制止より早く、彼女を目
にとめてしまっていた。

そして、梨良は、彼女を前に驚愕している。だが、その驚きも無理
ないものだとサハナは感じていた。

何故なら彼女の容姿は……梨良と瓜二つだったから。

「貴方は……どなたなの……何故、私と同じ……顔を……」
「……アンタが『光の姫』ね。」

彼女がそう告げるのと同時に梨良の身体が衝撃で吹っ飛ばされ壁へと激突した。

それに彼女が能力で吹っ飛ばしたのだと解ったサハナは、慌てて梨良のもとへと駆け寄っていく。かろうじて梨良は意識を保っていたが、突然のことに驚きを隠せず、彼女をただひたすら凝視していた。そして、ようやく震えた声で彼女の方を見たまま、サハナに質問し始めた。

「……サハナ、ちゃん……彼女は……？」
「……彼女、は……『闇の姫』、です。」

『光の姫』が存在するならば『闇の姫』もまた存在する。

『闇』が存在すれば『光』が生まれ、『光』が存在すれば『闇』が生まれる。

つまり、『光』と『闇』は表裏一体であり、同一でもある。

それらは間違いなく自然の摂理であり、必然的な運命。

だから・・・『光の姫』と『闇の姫』の姿が表裏一体であることも自然の摂理からすれば当然のことだった。

「・・・さつき・・・彼女は言ったわ、私が『光の姫』だって・・・貴方が、探していた人よね、『光の姫』って・・・本当に、私のことなの？」

「はい。」

その言葉以外に、サハナは何を言えたのだろうか。

これが現実だと信じられずに、驚いている梨良にどう声をかければいいのか解らない。だけれど、彼女が『光の姫』であることはすでに確認できていたから、嘘も言えなかった。

だが、梨良のシヨツクや、サハナの動揺もどうでもいいかのように、彼女は言葉を紡いでくる。

「・・・これが、『光の姫』だなんてがっかりね・・・能力一つ引き出せやしないなんて。」

「っ・・・」リラ姫”は記憶を失っておいでです、能力なんてコントロールできれば貴方なんてっ・・・」

「アンタは黙ってて。私は『光の姫』に話しかけているの。」

正論に反論もできず、サハナはやむを得ず口を噤んだ。しかし、表情からは納得しがたいという意思がありありと浮かんでいる。そんな会話についていけず、それでも必死に整理しようと質問を彼女に浴びせている梨良に、サハナは内心驚いていた。

「……『闇の姫』……何故、貴方は私と同じ顔を……？」
「アンタが『光の姫』であり、私が『闇の姫』だから。それ以外に理由なんて無いわ。私だって好きでこんな顔をしているんじゃないから文句言わないで頂戴。」

「私には梨良という立派な名前があるわ！いきなり、『光の姫』だの、『闇の姫』だの言われても……っ……第一、私が本当に『光の姫』なんていう証拠は……」

「さっきと同じ事を言わせないで。言っただしょ……私が『闇の姫』である限り、アンタが『光の姫』であるのは当然のこと。」

「……どういふ……こと？」

「……”リラ姫”、『闇の姫』は『光の姫』に合わせて……姿も声も細胞も、色以外はすべて『光の姫』とそっくりの容姿で生まれてきます。ですから、彼女が貴方と同じ容姿をしているということとは言い換えれば貴方が正当なる『光の姫』である証でもあるのです。」

「……っ……!!！」

そういうことなんです、と口を挟めば、ようやく納得いったのだろう、座りこんでいた梨良が沈黙した。

それによく解ったようね、と彼女が微笑む。その微笑に梨良は打ちのめされたに違いない。何しろ、自分の微笑みと瓜二つなのだ。梨良のシヨックを受けた様子に、サハナは不安を感じながら、冒頭に戻る本題を再び問うた。今度は彼女からはっきりと答えが返ってくる。

「それで……『闇の姫』である貴方が一体何でこちらにいらしたのですか？」

「……今回は、『光の姫』に忠告しに来ただけ。悪い事は言わないから、天球に帰るのは止めたほうが良いとね。」

「忠告……？」

「そう。」

「何故、そんな忠告を？」

「……そうね、色々あるけれど、一番の理由は私の大事な人が困るから、かな？」

「大事な人が……ですか？」

「そうよ。」

「それは出来かねます。」リラ姫”はヒツパルコスの姫……いえ、皇女であり、正統なる天球の女王の後継者でもあせられる。故に、天球には何としても戻って貰わなければ困るのです！」

「……サハナは酷いね。『光の姫』になつて苦しむのがオチだつて解つていて、そういうことを言つんだから。」

「なっ……！！」

「……『光の姫』、忠告はちゃんとしたよ。悪い事は言わないから、アンタのためにも、この地球に留まつた方が良い。」

そう言いながら手を翳す彼女。サハナはそれに抗議しようと止めるが、彼女は手から溢れる闇に包まれていく。

呆然としていた梨良は最後に消えていく彼女の微笑を見詰めながらも、脳裏に響く声に聞きいつていた。何故か、その脳裏に響く声がさっきまで目の前にいた彼女の声だと確信を持つことができた。

その不思議な現象が起こつたのは恐らく……彼女が梨良と同じ声だっただけではなく、他にもなんらかの要素があるのだろう。

一体それが何なのか、梨良には解らない。

だけれど、脳裏に響く声は梨良の困惑を余所に渦巻いていた。

『だけれど、アンタに覚悟がある

ならば』

「・・・サハナちゃん。」

「な、何でしょう?」

「彼女の・・・『闇の姫』の名前はなんと・・・?」

『・・・傷つく覚悟が本当にあるならば来なさい』

突然の梨良の質問に驚きながらも、サハナは恐る恐る答える。

そのそれはこれから起こるのであるう何かが動き始めた予感を感じたからでもあり、梨良の様子に不安を感じたからだ。様々な不安はあれど、1つだけ、1つだけ、サハナにも確実に感じていいることがあった。

梨良が、『光の姫』としての第一歩を歩み始めたのだということ。それだけは・・・今、目の前にいる少女からひしひしと感じられたから。

「・・・彼女には戸籍にのるような名前は名づけられていません。ですが、周りからは・・・リマ、と呼ばれております。」

☐ 天 球 に 。 ☐

彩りの縁6：天球との交わり？（前書き）

天騎の説明については今後の展開で明らかになっていきます。

彩りの縁6：天球との交わり？

・・・似遠いえんが、家に帰ってみれば、玄関を潜くぐってすぐに見える真正面の壁が凹み、蜘蛛の巣の様に罅割ひびれていた。

これだけですぐに、闇の姫が来たのだと解るのはありがたいが、さすがにこれはまずいだろうと、がっくりと項垂れる。

似遠いえんはあああと、肩を落としてつつ、廊下に目を向けると、茅波かなみが立っていた。茅波かなみはとても暗い表情をしていて、その様子に、何かあったのかを大体察することができたのはきつと、闇の姫がきたのだと確信が持てたせいだろう。

「お兄ちゃん・・・」

「・・・梨良しりの様子は？」

「それよりも、サハナちゃんが梨良しりさんに話しちゃったのよ！」

「そうか、サハナもその場にいたんだな？」

「うん。私は：会っていないけれど、梨良しりさんに瓜二つだって聞いた。」

「・・・そう、か。」

「梨良しり姉さんね・・・自分が光の姫だって知っちゃった。サハナちゃんも梨良しり姉さんが光の姫だって気付いてたし。」

やっぱり、天球に帰ってしまうのかなあ。

しゅんと頭を垂れる茅波かなみを励まそうと、ぼんぼんと優しく頭を叩く似遠いえん。それに少し気分が浮上したのか、茅波かなみが顔を上げる。

そんな茅波かなみに似遠いえんは少し浮かない顔をしながら質問する。

「茅波^{かなみ}、もし……俺も梨良^{しり}もここからいなくなってしまうたらどうする?」

「唐突だね。だけど、生憎様。その時はどんな手を使ってでも一緒に行くから!」

「……解った、お前の両親に連絡とって、学校にも連絡して休学扱いにしてやる。」

「えっ、いいの?」

「どっちにしても付いて来ることに変わり無いなら、お前の身が安全な方を選ぶさ。その代わりに」

以遠^{いえん}が後に続けた言葉に、茅波^{かなみ}は、ただ頷くことでしか、返事を返せなかった。それでも、似遠^{いえん}は安堵したように少し顔を緩めて笑みを見せた。その笑みが、どことなく寂しそだったのは、きっと気のせいじゃない。

とりあえず、似遠^{いえん}は茅波^{かなみ}と会話した後、居間へ入ることにする。そこには、梨良^{しり}とサハナがソファーに座っていた。

リラ、光の姫……そして、ヒツパルコス^{ヒツパルコス}の皇女

そして、俺の国を滅ぼした敵の娘

……竜王である俺にとっては敵であり、『時』の天騎である俺にとっては守るべき主君でもある

本当に、お前はややこしい存在だよ

もしも、お前が光の姫でなければ・・・いや、せめてあの男の娘でなかったなら俺はこんなにも悩まなかった

・・・だけれど、俺は・・・『竜王』という役目を放棄することはできない

だから、リラ・・・お前に決めさせてやる・・・俺を敵とすることをか

お前がこの星に残るならばよし、だが、天球へ戻るといふのなら

闇の姫と会ったせい、それとも、他の何かをサハナから聞いたのだろうか、真剣な表情をしている梨良に話しかける。とりあえず無難なところで、知らないフリをするのが賢明だろう。

「ただいま。」

「あつ・・・おかえりなさい、以遠君。」

「んーさつき茅波から聞いた・・・闇の姫だの、光の姫だのわけのわからん話だったけれどな。」

「・・・・・・・・。」

「で、さつきから黙り込んでいるが、お前はどつするつもりだ、梨良？」

「さあ、お前は如何する？」

俺にとってはお前の言葉が運命を左右するだけに、どっちがいいか

なんて言えない

だけれど……お前自身が選んだのならば、俺も覚悟を決めよう

「わたし……は……」

「……リラ様」

サハナが気遣わしげに梨良の傍に座りこんでいる。梨良の腕に見える包帯からすると吹っ飛ばされたのは梨良の方のようだ。梨良は目を瞑り何かを思っている。だが、しばらくの沈黙の後、言葉を選ぶように、ポツリポツリと話した。

「以遠君、私ね、家族が生きていたことに驚いているのよ。私も、捨てられたんじゃないかと、攫われて行方不明になっていたんですって……！もうすでに、母は亡くなっていらっしやるけれど、父は生きておられるそうなの……。」

そうだよな？とサハナに確認する梨良の横でサハナが顎を頷かせた。それは肯定を意味するのだろう。ぼんやりと聞いていた以遠は二人の会話に鼓動がざわめくのを感じていた。

「……父にね、その、会いたいの……もちろん、今の家族は大切よ。だけれど、父が一人であるのなら……ほっておけないと思うの。」

「では、天球に戻ってきてくださるのですね？！」

「……ええ、天球に……行ってみたいの。あの、闇の姫のことも……気になるし……」

・・・ああ、目の前が真っ暗になりそうだ

不安が大きくなる

鼓動がどんどん大きくなるのを感じる

俺は心の中のどこかで・・・梨良と戦いたくないと感じているのだ
ろう

警戒のシグナルが俺の脳裏で響く

？止める？とこの場で止めることができたならどんなにいいだろうか
だけれど、梨良はすでに決断しているはず

それも俺の予想している最悪の結末を描いて、だ

そして・・・選び取るのだ、己の運命を、そして光の姫として天球
に戻ることを・・・

・・・ああ、間違いなくお前は、俺と敵同士となる運命を選んだ

「・・・サハナ、一つ聞きたい。」

「はい？」

「・・・梨良は光の姫なんだろう。わざわざ光の姫と呼ぶからには
それなりの地位なんじゃないのか・・・？もしそうだとしたら一度
天球に戻れば、そうおいそれと戻ってくることはできないんじゃないか？」

「・・・え、そうなの？」

「おつしやられる通りです。光の姫は天球最高位の姫君であせられますから。」

「それって・・・天球の一番偉い皇女つてことよね？」

「茅波さんの言うとおりです。この国で言うなら、天皇陛下のお子様という立場にあたります。」

「・・・だとしたら、かなり狙われる可能性も高いよな、闇の姫のように梨良を襲ってくる奴もいるかも知れない？」

「それを・・・否定することはできません。」

サハナの言葉に梨良は思わず顔を上げた。そんな梨良にサハナは困ったように王族は常に狙われる存在ですからと言葉を選んで答えている。

そんなサハナの言葉に何かを考え込んでいる梨良に近づき、無理やり両手を取った。

瞬時に梨良の顔に朱色が灯るが、以遠にはその意味を考える余裕はなかった。

彼の言いたい言葉はたった一つ。

どうしても確認しておかなければいけないという思いからくるものだ。

「梨良。」

「えっ・・・ど、どうかしたの、以遠君？」

「・・・もし、お前が光の姫になったのなら・・・俺はもうお前の傍にすることはできないし、守ることももう出来ない。それでも、天球に戻るか？」

「・・・ごめんなさい、以遠君。だけれど、私・・・何故か解らないけれど、行かなきゃいけない。私が必要とされているのなら・・・天球に行ってみたいの。」

まっすぐに真正面から、以遠いえんの顔を見詰める梨良りらの言葉に迷いは微塵もなかった。そして、目の方にも覚悟が表れていたことを確認した以遠いえんは、仕方がないとばかりに、ため息をついた。

最早何を言っても無駄なのだと気付いてしまったからこそ、余計に気分が重い。

だが、梨良りらの選んだ道を間違いだとは思わない。これが運命なのだと己も覚悟を決めるだけだ。

やっぱり、その道を選ぶか

お前はやはり、光の姫だよ

記憶は俺が消したのにも関わらず・・・天球や父親に対する想い、そして・・・己の出来ることを全うしたいという願いがあるだなんてそれは光の姫としての責務を忘れていない証拠

ああ、やはり、お前は・・・あの男の娘だ

・・・だが、お前が選んだからには俺も選び取ろう

お前が光の姫としての責務を果たすことを選んだのならば、俺も竜王として、そして我が国の最後の生き残りとしての責務を果たそう

・・・お前が光の姫となるならば、俺は復讐を誓つて反逆者となる

「そうか。気を付けて行けよ。とはいえ、ちょっと一人で行かせるには不安だから・・・」

「お兄ちゃん、もちろん私が行くんだよね!？」

「え・・・?」

「サハナ、悪いがこいつも連れて行ってやってくれ。梨良がちゃんと天球とやらについて父親に会うのを見届けた後でいい。その後、芽波だけを地球に返してくれば、育ての親も安心できるだろうし・・・

・頼めないか?」

「・・・私からも御願いつ、サハナちゃん!」

「そ、うですね・・・梨良様も記憶が無い状態ですから、最初から独りきりでは不安でしょうし・・・。解りました、茅波ちゃんを連れて行きます。」

「茅波は、こっちに帰れるんだよな?」

「もちろん彼女については私が責任を持ってお送りいたしますよ。梨良様の御兄弟も当然とあらば、皇王様も喜んでお迎え下さいますよ。」

「わー、やったあ!!!」

「ありがとうございます、サハナちゃん・・・それに以遠君、茅波ちゃん・・・ありがとうございます。」

「・・・気を付けて行けよ。」

嬉しそうにしている梨良は気付いていなかったが、茅波には以遠の複雑な気持ち伝わってくるように感じた。

こうなるのも予想して、あの言葉を言っていたのかと思うと茅波は寂しくなった。

『・・・お前は何かあろうとも、梨良の味方である。』

『え・・・?』

『これからあいつは様々な出来事に巻き込まれ、光の姫としての責務の重さに悩むことになるだろう。だけれど、俺は梨良の傍にいて

やることはもう出来ない。だから……。」

それは、お兄ちゃんに代わって梨良姉さんを守れという意味。そして、例え：お兄ちゃんと敵対することになっても、梨良姉さんの方へつけという意味。

『……どうして……かなんて聞くまでもないね。だって言ったもんね……。』

『もしも……あいつが光の姫となるならば、それは俺にとって、復讐のための道具になることを意味する。』

『梨良姉さん、きつと、傷つくね。』

『そう……だな。だからそうなった時のためにもお前にはあいつを支えてやってもらいたい。俺には……無理だから。』

多分、俺はとことんあいつを絶望に追い詰めてしまう。だから

茅波^{かなみ}は以遠^{いえん}の言葉を思い出し、ぎゅっと拳を握り締めた。

いくら自分が口出ししようと、所詮、第三者なのだ。それならば、口出しするべきじゃない。自分は天球に連れていって貰えるだけでも運がいいのだから。

だけれど、以遠^{いえん}の言葉は 言い換えれば、望まない道を選ぶということ。それが茅波^{かなみ}にはとても不安だった。以遠^{いえん}も複雑な表情を見せている。梨良^{しりょう}には決して見せない所が曲者だ。

以遠^{いえん}も茅波^{かなみ}も内心は複雑だった。だけれど、それと反対に梨良^{しりょう}やサハナの表情は明るい様子で、拳を空につきあげて飛び上がっている。

「……そうと決まれば準備ですね。」

「あっそうよね……でも、何をすればいいのかしら?」

「ではさっそく準備しましょう、私もお手伝い致します!!」
「あつ、梨良姉さん、サハナちゃん、私も混ぜてよ〜!」

2階の部屋へ行ったのだろう、梨良とサハナを慌てて追いかけていく茅波の後姿を見ながら、似遠は携帯を手に取った。

その携帯の画面はメール編集を表示していて、そこに見慣れたメールアドレスと名前を打ち込んでいく。

To : maorredtenki@::ZYANZANNko
ku:::ne.jp

Sub : 光の姫がそっちに行く

本文 : 解っているとは思いが、死んでもボロは出すなよ。

俺は後から行くから、あいつらにも「光の姫が皇王と会うまでは手出し無用」と伝えておいてくれ。

カタカタと必要な事を打ち込み、ポチリと送信ボタンを押す。

正義マンの画像とともに「送信しました」という言葉が浮かび上がる。それを確認した後、携帯を折りたたむ。

しばらくその場に立ち尽くした後、何を思ったのか、似遠は携帯をソファアへと放り投げ、キッチンへと向かった。キッチンへ向かう最中、ブルルとソファアで携帯が鳴った。しかし、バイブレーターになっていないため、気付かれない。

携帯の小窓には「メール着信一件」と表示が出ている。

そしてその表示された文字の下には送信者の名前が入っていた。

『メール着信1件 マオ・ジャンサン』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2540y/>

彩りの縁

2011年11月6日02時12分発行